

「そうじ」について ①

目に見えない「心のほこり」は、どうすれば掃除できるの
であろうか。そもそも「ほこり」や「そうじ」という言葉で、何
が教えられているのだろうか。「おふでさき」では「そうじ（そ
ふじ、そふぢ）」という語は一号から十七号まで広く使われて
いる。今回は、「そうじ」という語に着目して、心の掃除・澄
ますことについて考察していきたい。

まず、一号 29 に「やしきのそうじ」という語が見られる。『注
釈』によれば、「やしき」とは「教祖の居住せられる屋敷」と「人
間の親里なる“ぢば”の所在地」という二つの意味が重ねられ
ている。ここでいう「やしきのそうじ」とは、親神の目から見
てその屋敷に住むのにふさわしくない人物を他に移すこと、ま
た、人々がそうした親神の思いを素直に受け入れることと解さ
れる。人情から考えて、その場所に長らく共に住んできた家族
同様の人を実家に戻すことは容易ではない。しかし、親神はそ
れを「やしきのそうじ」と喩えて、「親神の言うことを信頼して、
掃除してほしい」と促されている。

二号では、同じ「やしきのそうじ」という言葉を使って、そ
れが実行されたなら「夢を見たように、ほこりが散っていく」
と歌われている。また、二号の他の箇所では、人々の心を掃除
するのは、山奥にある池の湧き始めの塵埃を掃除するようなも
のだと説いて、その際、以下のように、「(親神の言葉を) だん
だんと心を静めて思索すると、(心が) 澄んだ水のように変わっ
ていく」(二号 26) と教えられている。

高山のをいけにいた水なれど
てバナハにこりごもくまぢりで (二号 25)
だんへと心しづめてしやんする
すんだる水とかはりくるぞや (二号 26)
山なかのみづのなかいと入こんで
いかなる水もすます事なり (二号 27)

三号では、冒頭で、「やしきのそうじ」という言葉はないが、
この道を広める上で不必要な建物がこの「やしき」にあること
を示した上で、それを「急いで取り払え」と促している。そして、
以下のように、それが実行されたなら、人々が神の道を一途に
進むようになり、その「心が勇み立ってくる」と歌われている。

このたびはもんのうちよりたちものを
はやくいそいでとりはらいせよ (三号 1)
すきやかにそふぢしたてた事ならば
なハむねいそぎたのみいるそや (三号 2)
しんぢつにそふぢをしたるそのちハ
神一ぢよで心いさむる (三号 3)
だんへとせかいの心いさむなら
これがほんのをさまりとなる (三号 4)

また、三号 52 からの一連の歌では、世界中の人々の胸の掃
除をする上で、神が「ほうき」となることが歌われている。こ
の 52 の箇所では、以下のように、51 と 52 が対句のような形
式を取って、人々のあいだに芯となるべき人(真柱)を据える
ことと、人々の心が掃除されることが並行的に示されている。
この真柱(しんのはしら)という主題は三号や他の号で度々登
場する。

せかいぢうむねのうちよりしんばしら
神のせきこみはやくみせたい (三号 51)

せかいぢうむねのうちよりこのそふぢ
神がほふけやしかとみでいよ (三号 52)
これからハ神がをもちあらわれて
山いかりてそふぢするぞや (三号 53)
ところで、「ほうき」という語は三号 145 にも登場するが、とり
わけ 105 では、「神が不思議な働きを現すのは、ほこりを払って掃
除しているのだ」と歌って、神が「ほうき」となって人々の心の
掃除をすることを「不思議な働きを現すこと」と言い換えている。

たんへと神の心とゆうものわ
ふしぎあらハしたすけせきこむ (三号 104)
このふしきなんの事やとをもちいる
ほこりはろふてそふぢしたてる (三号 105)

四号では、病気というのは、心のほこりが元で現れてくるこ
とが示されて、そうした病気を通して自身を反省することで、
心の掃除をするようにと促されている。具体的には、四号 110
では「どのような“痛み”や“悩み”や“できもの”や、ある
いは“熱”や“下痢”など、すべては『ほこり』(が元)である」
と歌われている。

これからハせかいぢうのむねのうち
上下ともにわけてみせるで (四号 107)
これをみよせかいもうちもへたてない
むねのうちよりそふぢするぞや (四号 108)
このそふぢむつかし事であるけれど
やまいとゆうわないとゆてをく (四号 109)
どのよふないたまなやみもでけものや
ねつもくだりもみなほこりやで (四号 110)

以上、一号から四号までを見てきた。親神は、目に見えない「心
のそうじ」を促すために、目に見える具体的な姿を示されてい
る。すなわち、「やしきのそうじ」として人を他家に送り出し
たり建物を取り払ったりすること、あるいは、その逆に芯とな
るべき人を「やしき」に迎えること、そうしたプロセスにおい
て「心のそうじ」が促されている。その際、親神は、不思議な
働きを見せたり、あるいは病気を与えたりすることが分かる。

五号では、心の掃除というのは親神の深い思惑に基づいてお
り、心を掃除して親神の思いが心底分かったなら、この世界を
創めた働きを現す「つとめ」の手を教えていくと歌われている。

いまでハ心ちがいわありたとして
ひがきたらんてみゆるしていた (五号 25)
このたびハなんでもかでもむねのうち
そふぢをするでみなしよちせよ (五号 26)
むねのうちそふぢをするとうものな
神のをもちふかくあるから (五号 27)
このそふぢすきやかしたてせん事に
むねのしんぢつわかりないから (五号 28)
この心しんからわかりついたなら
このよはぢまりてをつけるなり (五号 29)

六号では「そうじ」という語は見られない。ただし、心の掃
除と関連する「澄ます・澄む」という語は登場し、15 で「一
日一日と心が澄み、成人・成長するにしたがって、親神の真意
が分かるようになってくる」と歌われて、心を掃除する・澄ま
すということが「心の成人・成長」と並列的に表現されている。